



Title	韓国高年層日本語の実態からみる第二言語の保持
Author(s)	黄, 永熙
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49438
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【10】

氏 名	ファン ヨン ヒ 黄 永 熙
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 2 4 3 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 20 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	韓国高年層日本語の実態からみる第二言語の保持
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 渋谷 勝己 (副査) 教 授 真田 信治 教 授 土岐 哲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、戦前・戦中に日本の植民地下で日本語を習得し、終戦後ほぼ 60 年のあいだその日本語をほとんど使用せずにきた韓国高年層日本語話者 8 名を対象にして、現在におけるその日本語保持のありかたを詳細に分析することを試みたものである。研究の社会的・

研究史的背景、調査方法等をまとめた第1部と、韓国高年層の保持する日本語の多様な実態を詳細に記述し、その多様性をもたらした要因を深く追究した第2部の、2部より構成される。A4判156ページ、原稿用紙に換算して約500枚の分量である。

第1部は3章よりなる。第1章では、現在の韓国高年層が戦前・戦中に受けた日本語教育や、当時の韓国における日本人の人口とその出身地域、現在における日本語使用状況など、背景的なデータが示される。また第2章では、本研究の目的と、先行研究をふまえたうえでの本研究の特徴が述べられ、第3章では、調査の概要とインフォーマントの情報、データ情報などがまとめられている。

続く第2部は本論であり、日本語能力や日本語との接触度などの異なる韓国高年層日本語話者8名について、日本語母語話者とのあいだで行われた自然な会話を主なデータとし、いくつかの語彙・文法事象に焦点を当てて、その保持する日本語の実態を解明しようとしたところである。8名のうち4名については年齢の異なる日本語母語話者との会話を収録し、そのスタイル切換えのありかたについても分析を加えている。

具体的には、まず第4章では、存在表現を取り上げて、インフォーマントにオルの使用が顕著であることを見出し、その理由として、当時接触した日本語ではオルが多用されていたことなどをあげている。続く第5章では、可能表現を取り上げて、五段動詞に可能動詞、一段動詞に助動詞ラレル、サ変動詞にデキルを使用しつつも、一部の話者に動詞基本形による代用やヨクの使用が観察されることなどを指摘している。アスペクト表現を取り上げた第6章では、存在表現にオルが顕著だったことと異なってテイルが優勢であること、また意味的には動作持続の意味で使用されるケースが多いことなどが述べられる。また否定表現を取り上げた第7章では、方言形がワカルといった特定の動詞や2拍の五段動詞に多く、またモーダルな意味を内在させているために三人称主語をとりにくいことなどが指摘され、文末表現を取り上げた第8章では、ヨが丁寧体と緊密に結びつき、日本語母語話者のヨと同じ用法のほかに、韓国語の丁寧形式yoの意味の転移を含んだ用例がある可能性が示唆されている。以上、いずれの章においても、先行研究によって明らかにされた旧南洋群島や台湾の高年層日本語、在日コリアン一世などの日本語と比較することによって、韓国高年層日本語の特徴をよりいっそう明確に浮かび上がらせることを試みている。

第9章はまとめであり、韓国高年層日本語話者に観察されたバリエーションの保持状況から、個々の話者の日本語を安定型、混在型、単純型の3つのタイプに分類し、それぞれのタイプは、日本語の単純化や韓国語からの転移の異なった度合いによって特徴づけられる、また学歴や日本語との接触歴などの話者の社会的属性と相関するとまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の植民地下で日本語教育を受けた現在の韓国高年層の保持する日本語を対象として、その語彙・文法的な側面を、主な対象とした日本語母語話者との会話データのほかに、調査票による翻訳調査の結果なども手がかりにしつつ、詳細に分析することを試みたものである。日本の植民地下で習得された高年層話者の保持する日本語については、

これまで、旧南洋群島や台湾の話者を対象とした研究に一定の蓄積があるものの、韓国の場合、その研究は、さまざまな要因から遅れた状況にある。

本論文の第一の意義は、日本語能力や日本語との接触度などの異なるインフォーマントを対象にして、存在表現、可能表現、アスペクト表現、否定表現、文末表現といった、命題内部の要素からモダリティまで、文のさまざまな要素や文法カテゴリを、母語話者の日本語という枠から脱して日本語学習者の日本語に内在する論理という視点からつぶさに分析し、日本語母語話者の日本語とは異なった独自の日本語を保持していることを明らかにした点にある。また同時に、各表現において、西日本出身の日本語母語話者が多いという環境において習得された日本語のなかの西日本方言的な要素がどのように維持され、どのような対話の相手に対してどのように使用されるのか、話者のもつ社会言語能力もあわせて解明した点も評価できよう。韓国高年層の日本語を、先行研究に基づきつつ、旧南洋群島の高年層日本語、台湾の高年層日本語、在日コリアン一世の日本語、現在日本語を学んでいる韓国日本語学習者の日本語などと比較することによってその異同を明らかにしている点は、従来の研究の総合として、この分野の今後の研究の発展に大いに貢献するところである。

一方、本論文に問題点がないわけではない。たとえば、論文のなかで使用された分析のための用語のいくつかにややあいまいなところがあり、また当時の日本語教育の実態や母語からの転移などについて、根拠が十分でないままに議論が展開されているところが散見される。また、最後の第9章で一般化して示された安定型、混在型、単純型といった話者の3つのタイプや、その個々のタイプをもたらしたとする社会的要因の認定方法もやや思弁的であり、提示されたデータや分析によって必ずしも裏付けられていないところがある。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、韓国高年層の保持する日本語の多様な実態を詳細に記述し、その多様性と話者の属性などの社会的な要因との相関を一定程度明らかにした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。